

でニュークリエーションの理論は一番理解しにくいものの一つですが、それを正しく使うにはやはりその専門の人が議論する会議に出席する必要があると思います。

最後にこの国際会議は次回(第13回)、米国 Salt Lake City で1992年に筆者が Wagner 教授と一緒に co-chair-

men としてお世話することに決まり、公表されました。その会議は今回同様やはり Montreal で1992年開催を決定している国際雲物理会議と組んで行われる予定です。是非日本から多数参加、良い研究を発表して頂きたいと思います。

研究連絡会制の発足のお知らせ

総合計画担当理事

「天気」1月号で浅井理事長が述べておられるように、気象学会は、会員の積極的活動によって支えられている、と同時に、そういう活動がやり易い環境をつくるよう努める必要があります。特に、研究交流や情報交換の面で、気象学会が果たしうる役割は大きい。研究・調査の成果報告に関しては、論文・報文として気象集誌や天気があり、それらが最近ますます充実しつつあるのは喜ばしいことです。しかし一方、口頭発表については、春や秋の大会があるものの、それらは最近ますます窮屈になりつつあって何らかの改善を必要としています。即ち、これまでの活動の場だけでは、大きく変貌しつつある気象学会をとりまく情勢に対応しきれない一面があります。

一方、学会などにおける伝統的な研究分野のカテゴリに必ずしも適切に収まらないようなテーマが、一定数の人たちの共通の問題意識として浮上してきています。それに対して学会では昨年からスペシャル・セッションを大会で導入しました。

単に研究発表の場ということに限らず、共通の問題意識と関心の元に、ある一つのテーマに力を合わせて取り組みたいと考えている人たちが増えつつあるように見受けられます。そういう芽がスムーズに育つよう、気象学会では、組織の一環としてテーマ毎に「研究連絡会」を必要と希望に応じて設けてゆくことになりました。その最初の研究連絡会として、南極など極域に重点をおいた大気科学を扱う「日本気象学会極域研究連絡会」が安成哲三会員を代表世話人として発足しました。研究連絡会が複数個になった段階で理事会の中に「研究連絡会委員会」を設け、それに担当理事がついて理事会と各研究連

絡会の意志の疎通を図ることになっています。当面は、総合計画担当理事が担当いたします。

研究連絡会は、若干名の世話人によって自主的に運営していただくこととなります。そして、関連の研究発表会や情報交換がこの組織を通じて効果的かつ活発に行われることを期待しています。例えば、研究連絡会が企画する講演会などを春や秋の大会に時期を合わせて行うことや、または世話人の手作りのニューズレターなどを発行するなど考えられます。当面はそれらの活動に対して予算的裏付けが十分にできずボランティア精神に頼るところが大きいですが、経過を見ながらなるべく早く可能な限りの経済的補助ができるよう考えて行くつもりです。

研究連絡会をつくるには、主体的運営を前提として、まず発起人と世話人グループが必要になります。そして、当面は総合計画担当理事に希望の如何を伝えて頂くことになっています。研究連絡会はオープンを原則とし、いわゆるグループ化を趣旨としておりません。従って、世話人は例外ですが誰かが何かの研究連絡会に所属するという概念は存在せず、そのテーマに関心のある人は全て等しくその研究連絡会に参加できるものです。また、研究連絡会としての活力が低下してきた時には適宜解散するという事も起こり得ましょう。これは、別の表現をすると、どのようなテーマが現在活発に生きているかが、そのための研究連絡会の存否あるいは活力を見ることである程度推し量れるということになるかも知れません。それはともかくとして、学会中央によるサービスの範囲内のみで交流し表現し主張する時代は去りつつあるようです。